

○千葉桂子\* 立花厚子\*\*

(\*福島大, \*\*日本女大)

目的 近年の子どもの体型は、長身・スリム化が著しく進んできたといわれている。そのことは日本人の子どもの全体的な傾向としてとらえられているが、実際の成長様相の変化に関する詳細はあまり明らかにされていない。本研究では近年の成長期女子の体型特性について、年齢に伴う変化をとらえることを目的とした。また、成長様相の時代的变化を把握するために1978～81年に通産省工業技術院が実施した「日本人の体格調査」の結果との若干の比較を行うものである。

方法 資料は(社)人間生活工学研究センター(HQL)が1992～94年に実施した人体計測データの一部であり、11～17歳の女子1911名の25項目(高径6項目、長径5項目、周径13項目および体重)である。年齢ごとに各項目別分布の尖度・歪度を求め、正規性の検定を行った。さらに主成分分析を行うことにより、年齢ごとの体型特性をとらえた。また、体型を概観できる7項目を選び、「日本人の体格調査」の結果と共にモリソンの関係偏差折線を求めて比較検討した。

結果 各項目の分布について正規性の検定を行った結果、ほとんどの年齢においてウエスト囲とヒップ囲が正規性から乖離していた。サンプル全員を一括して主成分分析を行った結果、第3主成分まで抽出された。またこの結果は11～13歳の各年齢では同様であったが、14～17歳においては第4主成分まで抽出され、成人体型に近づく過程における体型特性の多様性をとらえることができた。17歳を基準集団としたモリソンの関係偏差折線では、HQLの計測データにおける全項目で13歳と14歳の値に顕著な差異が認められた。